日本クリスチャン・アシュラム連盟

イエスは主なり

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　144号

最も小さい者たちのひとりに

岡山　敦彦

映画館でマザーテレサの映画が上映された。私は、残念ながら見る機会がなかったが、ビデオが発売されたのでテレビで鑑賞する機会があった。今までも、彼女の活動は様々なメディアに取り上げられ、多くの日本人が彼女のことを良く知っている。数年前、福岡市で彼女の写真展があったので、私も教会の方々と行ったことがある。あの貧しいインドで、ただ死に行く人たち、小さな子どもたち、誰からもかえりみられることもない人たちに、無償の愛を届ける彼女の姿には、誰しもが感動を覚える。

私はビデオを見ながら、2000年にインドのサッタルで行なわれた国際アシュラムのことを想い起こした。大石嗣郎先生が団長で10名ほどの参加者であった。私は初めてのインド訪問であり、驚きの連続であった。インドは暑い国との印象が強いが、北部の高冷地では、凍死する人や餓死する人が多いと聞いて驚いた。観光地に行くと、物乞いをする人たちの姿も多く、街ではストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちの姿をよく見かけた。車が、信号で停止すると、子どもたちが危険な中、近寄ってくる。日本では全く見られない光景である。

私たちの教会では、キリスト教系のNGOを通して、フィリピンのある女の子を里親としてサポートしてきた。小学校の2年生だった彼女も中学生になった。今年4月に連絡があり、彼女の両親が安定した仕事に就くことができたので、サポートの必要がなくなったとの知らせであった。私たちは、まず主に感謝の祈りをささげた。そして、新しく5月からサポートをすることになったのはバングラデシュの女の子です。インド旅行で一緒だった土山牧羔先生は、帰路バングラデシュに立ち寄られた。バングラデシュはインドよりもっと貧しいとお聞きして、衝撃を受けたことを覚えている。

インドで宣教と福祉に生涯を捧げられたスタンレー師のことを、想い起こしながら、私たちも、ちいさい者たちに、小さなことでも行なう者とされたい。それも、主との交わりの中で、なすべきことを示されるように。

（日本同盟基督教団小倉中央キリスト教会牧師）

霊想

「み旨が成りますように」

木部　安来

イエスは、もし、ふたりが心を合わせて祈る祈りを適えて下さる。(マタイ十八章十九節)。と約束された。今まで心を合わせて多くの祈りがささげられました。

イエスの祈りへの勧めの応答の言葉は深い意味が秘められているのである。

第一に祈りは自己中心的な自分に必要なものだけを求めてはならない。

クリスチャンは交わりの仲間としての全体を覚えて祈るべきである。自己中心的な祈りでない祈祷は必ずこたえられるのです。

祈りの基本の法則とは自己中心なものではなく神のみ旨を祈ることである。わたしたちは、悲しみや困難状態からの逃避のみ祈る。しかし、神の答えは常に私たちが逃避でなく勝利を与えることを望んでおられる。

その完全な例は、ゲッセマネのイエスの祈祷に学ぶことができる。

イエスは十字架から逃れることができるように祈られたが、そこから逃れる代わりに、それに立ち向かい、耐えて勝利する力が与えられたのでした。

自分を忘れて祈る者に神は必ず応えられるが、それは神のためであって、必ずしも祈る者が願った通りのものではなかった。

イエスは、イエスを信じる者が集うところにはたとえ数人でも、共におられ、ひとり、ひとりにご自分のすべてを与えられる。何か特別な場合でなければ最善を尽くさない人がいるが、イエス・キリストにとってはすべての場合、たとえ二人、三人でも、イエスの名に因って集まる時にでも特別な場合なのである。神とクリスチャンの天地呼応の関係は、イエスによって罪贖われた神の子とされた者と、主である。その交わりにおいて、キリスト・イエスの名によって『共に祈る』その祈りはクリスチャン・アシュラムの集いの中にも聖霊が現臨してくださるのであります。

祈祷の祭壇は旧約聖書でしばしば繕われたことにおいて祝福と勝利が与えられた。

祈祷の聖壇は世の力の侵入で、肉の行為によって崩れた。『あなたがたの方縦や、泥酔や、世の患いのため…』ルカ二十一章三十四節

良く祈ろうとすれば、肉にところを得させてはならない、すなわち肉に祈祷を破壊させてはならない、祈祷の道は『自分を捨て、日々自分の十字架を負うていく』(ルカ九章二十三節)ものである。

崩された祈祷の聖壇は繕ったようにみえても、もし、肉から離れていないならば、本当に繕われたといえない事態が発生する。

もし、絶えず築き直さないなら祈りの聖壇は崩れる。祝福、応答はなく、失敗と悲哀と、絶望が起こる、という厳粛な祈祷の法則は決して忘却してはならない。これは生命の法則と同じで、神の国と。神の栄光の顕現と保持と、クリスチャンの信仰生涯の祝福の保たれるための法則で、律法であります。

研がない刃物は切れ味が鈍る。そこで研ぐと切れ味が良くなる。祈祷の正しい姿を保つべく不断の努力が求められる、祈祷の壇を崩すのは『自分』である。自己の承諾なしには崩れない、外からの働きで祈りの習慣がなおざりにされるのではなく、我が内の肉の思いと行動で軽視されるのである。

『…自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見出だすであろう』『たとえ人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また人はどんな代価を払ってその命を買いもどすことができようか』マタイ十六章二十四節～二十六節『。

アモスは今も預言を聞かせる『…それはパンのききんではない、水にかわくのでもない、主の言葉を聞くことのききんである』八章十一節。また警告している「主はイスラエルの家にこう言われる、『あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ。五章四節。

そして、今も、優しく、熱心に、愛をもって警告している『…それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった』四章十節の終り。十一節の最後も『…あなたがたはわたしに帰らなかった』と主は言われる。

『それゆえイスラエルよ、わたしはこのように行う。わたしはこれを行うゆえ、イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ』。四章十三節。と愛をもって警告している。

立証

「主の忍耐」

新宿西教会教会
川村　秀夫

幼かった頃、向かいの親しかった軍人さんのおばあちゃんが亡くなられた。棺には黒い布が掛けられ、その上に十字架が置かれていた。少なくとも帝国軍人は神様である天皇陛下の元にいるはず、耶蘇を信じるとは不可思議に思った。戦後の混乱の時、神を信じる者は弱者であって、科学によってこそ人類は幸福になり、全てに勝るものと思っていた。

社会人となり高度成長の時を迎え、徹底した管理主義者となり、猛烈社員と変身し、競争社会の人を愛することの出来ない時代へと向かっていった。この時に社内で難波捷吾、西堀栄三郎に会い仕事の真髄を教えられた。二人の科学者がともにクリスチャンであったことを葬儀の時知りショックを受けた。

家庭のことは母親任せ子供の教育も母親任せで、好き勝手なことを思う存分やる父親であり、子供たちからは尊敬されない存在であった。私は心の中で長女が一番かわいく思っていた。彼女の在学中は色々な事があったようだが、わたしは全く子供の状態を見抜くことが出来なかった。彼女が医療短大を卒業し、医療とは全く関係のない、変な会社に就職した。おかしいなあと思っているうちに、彼女が統一協会員であることを知り大ショックを受けた。

数年後、元メンバーから彼女を救出することについての話があった。話を聞いて私が絶対不可能であると思っていたことが実は可能であると知ってまたショックを受けた。子供を愛していれば出来ることであることを知らされ、この時点でなんとしても統一協会から娘を取り戻すのだと決意をした。人を愛するってどのようなことかをこの時から真剣に考えるようになった。しかしまだその時私は猛烈社員だったので会社を休むのは罪悪との思いがあった。それで先ずこの罪悪感との戦いから始まった。会社では、私と社長はいつも話の出来る距離にいた。だめと言われれば会社を辞める覚悟で救出活動を続けていた。救出活動が軌道に乗ったある時、社長と話しをした。社長との約四十年の付き合いの中で知っていることは長期休暇を取れるなどとは思いもよらないこと。しかし社長は私の話を聞き快く受けてくれ、更に励ましを受けた。私にとっては「絶対に考えられないこと」であった。わたしにとってはまさに奇跡であった。

マンションでの説得中、私の不手際や愛のたらなさ、親の愚かな行動で、人には言えない惨めな状態が何日も続くが、しかしその欠け多い私と家族は共にいて下さる主に支えられて過ごすことが出来たことはとても感謝なことであった。あるとき彼女は一人で図書館に本を返しに行きたい「絶対に逃げないから私を信用して欲しい」と言った。やむを得ず娘を送り出し彼女が戻ってくるまでの時間は人生で一番長い時間であった。家を出て彼女はどうしようか迷っていたそうだが、絶対会うはずのない元メンバーに出会い、自分は守られていると感じたとか。このことも私にとっては奇跡でしかなかった。

聖書を読み続ける私に向かって彼女は「将来クリスチャンになるのでしょう」と、「なる」と私は答えたが、また娘に試されたとその時は思った。しかし、これは聖霊様の働きではないかと今では思っている。そして一九九四年十二月二十五日クリスマスに洗礼を受けることが許された。主は約六十年近く忍耐強く私を待ち続けて下さったのだ。

感謝

第三十七回城北アシュラム報告

飯島　庸江

去る二月十一日の祝日に、池の上キリスト教会を会場にして行われたこの城北アシュラムにつきましては、前号第一四三号に、「福音の時」の助言者有馬歳弘師のメッセージが「渇くことのない水」と題した霊想に、また出席者の真鍋功兄の立証が載せられていますので併せてお読みください。

今回のアシュラムの主題は、ヨハネ四章十四節の「いのちの水をあなたに」でした。九時四十分より奉仕者と座長による準備祈祷会、十時より更生教会の原田謙師のお導きによ

る「開心の時」ガラテヤ二章十九～二十節より語られ、ついで十一時より一回目の「祈りの細胞」が持たれました。出席者が八分団に分かれて座長の導きのもと、ニードの表明と祈りの時を持ちました。チャペルで記念写真を撮り、ついで昼食と出席者を紹介する交わりの時が持たれました。

一時より「静聴の時」、新宿西教会の川村秀夫兄がエペソ書四章より行い、その後有馬歳弘師による「福音の時」。霊想に記されているようにサマリアの女に出会うためサマリアを通られたイエス様についてメッセージをいただきました。次の二回目の「祈りの細胞」ではニードに対して与えられたみ言葉の分かち合いと祈り合いがなされ、恵み豊かな時となりました。最後に池の上教会の島津吉成師の導きで「充満の時」が持たれました。ニードに対して与えられたみ言葉がもう一度分かち合われ、

「イエスは主である」
「イエスはよみがえられた」
「イエスは実によみがえられた！」

の唱和により感謝と献身の思いが表明されました。

奉仕者と座長の短い反省連絡会の後、入り口で写真を受け取り、五時前に散会いたしました。福音の時に行われた席上献金も祝されました。

第十三回東京新生教会アシュラム報告

横山　義孝

アシュラムは参加するごとに神の家族という思いが増幅され、教会への結びつきも強化される良い集会です。個人としてのニードのみならず、教会員としての建設的なニードも述べられ、時々は実現に導かれて神の国の前進に寄与することができるのです。より多くの方が参加なさり、城北アシュラムのみならず、各地で持たれるアシュラムが更に盛んになることを祈って筆を置きます。

平成十八年二月十八日（土）午後七時より十九日（日）午後三時まで第十三回当教会アシュラムが開催されました。七時～八時「開心の時」はまず第Ⅱコリント三章十二～十八章によって「主に向き直ろう」と題してメッセージが横山牧師によって語られました。アシュラムは愛による心と身体、霊の癒し、また神と過す休暇、聖霊の豊かな満たしを頂く祈りによる交わりの時である、との言葉を受けて、開心の時が持たれました。八時から九時、「グループによる祈り」の時に入り参加者が三分団に分かれて、一人一人魂のニードが分け合われ、右隣り人のために夫々が順に祈る時が持たれました。十時から翌朝七時迄は「連鎖祈祷」の時。予めアシュラム参加申込書に自分の祈りたい時間帯を記し、各自の家庭で、時と所を聖別して祈りの連鎖を持ちました。翌朝九時三十分から十時二十分迄「静聴の時」に入り、コロサイ一章一から二十九節と、詩三十二篇をテキストとして、聖霊の導きのもと、昨夜の連鎖祈祷の恵みも合わせて分かち合いが活発になされました。

十九日（日）午前十時三十分より公同礼拝が持たれました。今年はゲスト立証者として、新宿西教会の川村秀夫を迎えました。同兄の最愛の娘さんが原理（異端）に捕らえられた状態から奇跡的に救出され、それが同兄の入信のチャンスとなったという、聖霊の不思議な導きに一同が感動しました。続いて「聖霊に導かれる生活」（ガラテヤ五の十六―二十六）のメッセージが語られました。午後一時迄愛餐で楽しい交わりの時。続いて二時迄は「グループの祈りⅡ」を持ち、三時まで最後の「充満の時」に入りました。今回は特に川村兄によって、日本アシュラム五十周年記念にあたり、DVDの記録によって、スタンレーアシュラムの歴史を学び、「神の漁り人」の小冊子が全員に配布されて誠に恵み豊かな充満の時となりました。

地区アシュラム予告

▼第25回横浜岡村アシュラム
と　き　7月8日(土)～9日(日)
助言者　横山　義孝

▼第44回関東アシュラム
と　き　9月18日(月)～20日(水)
ところ　山崎製パン箱根山荘

▼第41回九州アシュラム
と　き　9月17日(日)～18日(月)
ところ　福岡黙想の家

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ（Y）

〒一八一―〇〇二三鷹市井口3―15―8
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一四五五八
理事長　大石嗣郎